ASLE-Japan / 文学・環境学会

NEWSLETTER

The Association for the Study of Literature and Environment in Japan

December 15, 2005, No. 19

【役員名簿（2004-2006）】

代表：生田省悟（金沢大学）
副代表：高橋 勤（九州大学）
顧問：秋山 健、上遠恵子
事務局長：結城正美（金沢大学）
事務局補佐：茅野佳子（明星大学）
喜納育江（琉球大学）
会計：横田由理（広島大学(非)）
辻 和彦（福井大学）
監事：西村頼男（阪南大学）
ニューズレター編集委員：
小谷一明（県立新潟女子短期大学）
上岡克己（高知大学）
山城 新（琉球大学）
会誌編集委員：
木下 卓（愛媛大学）
高橋昌子（三重大学）
野田研一（立教大学）
パトリシア・ライオンズ（愛媛大学）
山里勝己（琉球大学）
コンピューターセンター：
岩政伸治（白百合女子大学）
北国伸隆（萩光塩学院）
山城 新
評議員：
ブルース・アレン（順天堂大学）
石幡直樹（東北大学）
伊藤詔子（広島大学）
小田友弥（山形大学）
関口敬二（大阪府立大学）
高田賢一（青山学院大学）
巽 孝之（慶応義塾大学）
豊里真弓（札幌大学）
中村邦生（大東文化大学）
村上清敏（金沢大学）
吉田美津（松山大学）
吉崎邦子（福岡女子大学）
研究助成：
稲本 正（オークヴィレッジ）
岡島成行（日本環境フォーラム）
生田省悟（代表）
高橋 勤（副代表）

ASLE-Japan／文学・環境学会のこれから

代表　生田省悟（金沢大学）

紅葉が美しい札幌での全国大会が盛会のうちに終了したことをまずは慶びとしたい。積年の憧れであった高田宏氏の講演からシンポジウムにいたるまで、その充実ぶりはすばらしかったし、心に残る、大切にしたいと思う言葉もいくつか耳にすることができたりもした。それに早朝、札幌大学構内の森の散策は実に楽しかった（植樹されたイチイの赤い実にそそられ、つい二つほど失敬したことはお許しいただけると思う）。準備に奔走された実行委員はもとより、会員諸氏のご尽力のおかげと感謝の思いで一杯である。とりわけ何かと便宜を図っていただいたばかりか、多大なご支援をも賜った会場校、札幌大学には心から篤くお礼申し上げる。

さて、今回は新たに翻訳分科会の設置が承認されたし、院生組織も動き出したとの報告があった。学会のさらなる発展にとって喜ばしい限りであり、その活動も大いに期待される。さらに欲を言えば、文学研究とは異なる領域で活躍中の会員にもっと前面に出てきてほしい、そして私たちに強い刺激を与えてほしいということがある。実際、会員名簿やニューズレター前号からは、そうした方々の存在が如実に窺われる。活動拠点が分散しているため、連携が難しいとの問題もあろうが、ぜひご一考いただきたい。それというのも、名称の一部に「環境」を戴いている学会であるからには、他の文学関連学会とは違う、独自の活動があってしかるべきとの思いを改めて強く抱くところだからである。複数の領域が交流・協同することに私たちの学会の意義が見出せるはずだし、いわゆる環境文化に対し、学会としてこれまで以上に幅広い形の提言・貢献ができるのではないだろうか。

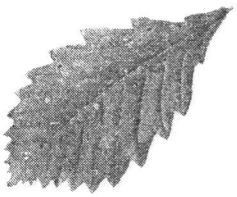
今後の活動についてであるが、来年９月には全国大会が杜の都仙台で開催される運びだし、再来年の夏か秋には国内で日韓合同シンポジウムが催される見通しである。それぞれを、日常の研鑽の成果を発表するまたとない機会、あるいは東アジアからの発信という発足当初からの課題遂行の第一歩と位置づけていただきたい。このような活動を行なう中で、文学・環境学会をどのような形にしてゆくのが望ましいのか。会員ひとりひとりが担うべき責務とお考えいただければ幸いである。■

ASLE オレゴン大会全体報告

ASLE-US の大会に参加して

岩政伸治（白百合女子大学）

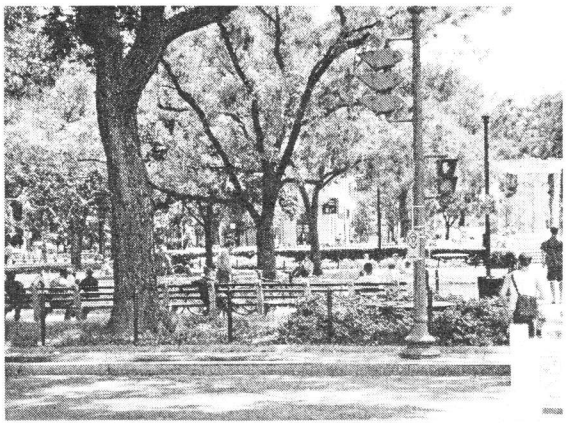
亜米利加央州奇譚



サンフランシスコ国際空港から複雑に入り組んだベイエリアを眼下に北にしばらく進むと、綿を敷き詰めたような雲の絨毯が現れ、水滴が無数の線となって飛行機の窓ガラスをなぞっていく。雲で視界は遮られているが、湿潤な気候のエリアに入ったことが伺える。眺めが期待できなくなったのでファイルケースから読み物を取り出してふと気が付いた。私が持っていたのはテリー・テンペスト・ウィリアムスが雑誌 *Orion* の電子版に寄稿した“Scattered Potsherds”、飛行機の中はたまたま居合わせたモルモン教の若い宣教師たちの集団でごった返していたのだ。彼らはウィリアムスを知っているのだろうか。余計なことを考えながら、そのエッセイを読み始めてみると、今度は自分が滑稽に思えてきた。今読んでいるエッセイはウィリアムスが体験した同時多発テロのルポルタージュでもあるのだ。飛行機嫌いで数年前まで飛行機に乗ったことさえなかった私が空の上で、克明に書かれたテロの体験を読んでいる。気流の関係か、適度に揺られながらソローの *Cape Cod* に出てくる難破船を思い出した。

しばらくすると、時折窓の外が明るくなり、日差しが読んでいる紙の上にあたるようになった。窓から外を眺めると、まもなく雲の切れ目から緑に囲まれた美しい町が顔を出した。オレゴン州ユージーン。山間部に密集する濃い緑の針葉樹林に囲まれ、草原や牧草地、町並みに沿って植えられている広葉樹の薄い緑が映えて眩しいほどだ。出発時にサンフランシスコが霧による視界不良だったため、１時間半遅れての到着である。

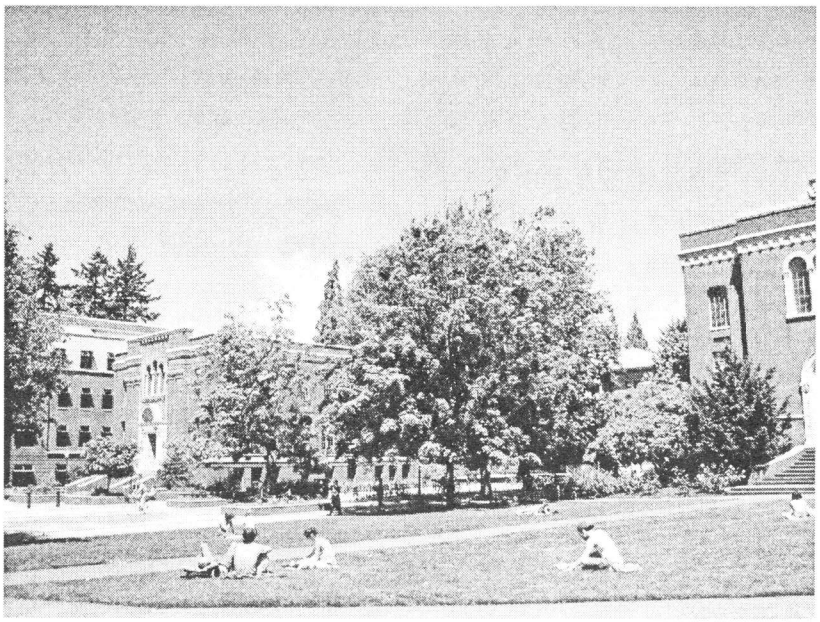
予期せぬ自然の悪戯で、ホストファミリーとの待ち合わせ時刻を大幅に過ぎていた。何を隠そう今回、大会出席中生まれて初めてのホームステイを体験するはめになっていたのである。大会へのエントリーが遅かったために、参加者が宿泊できる大学の寮はすでに満杯でキャンセル待ちをしていた私は、大学の近くに住むある家族が参加者の受け入れをしているとの大会準備委員会からの申し出に乗ったのであった。幸いにも彼らは辛抱強く私を待っていてくれた。出迎えてくれたのは Mary と９才になる彼女の娘 Zannie、５才になる彼女の息子 Forest。大工をしている彼女の夫、Art は仕事に出ているということであった。Mary はニューヨーク州で生まれ育ち、東海岸の大学で音楽を専攻、現在はハープの講師をしている。Art は物理学の修士号を持ち、大工の傍ら、オレゴン大のサマーセッションでは教壇に立っているという。



Zannie がイタズラっぽい目で、キャンパスタウンに行くには二つのルートがあるが、どっちにするか聞いてくる。一つは近道、もう一つは景色がもっとも美しい道、時間が押していたが私は迷わず彼女が勧める「もっとも美しい道」をお願いした。空港を後にして、のどかな田園風景と、点在する木立を通過しながら Mary が言った。「ユージーンの美しさは私たちの自慢だけど、最近この先に日本からコンピューター関連の企業が進出してきて、工場から出る排水が問題になっているの。私たちは反対しているわ。」その企業は実際は韓国系であったが、その製品の最大の消費国は恐らく日本である。反論はしなかった。

日本を発つ前、現地の情報をリサーチしていた私は、ホストファミリーが戦争反対と、核兵器廃絶のための集会に名を連ねていることをたまたま発見した。隠しておくのも変なのでその旨を伝えると、彼女は笑いながらこう答えた。「ユージーンはヒッピー達が最後にたどり着いた場所なの。」ここでは週末になるとそういったアーティストたちのマーケットが開かれているそうだ。緩やかな坂を下るとオレゴン大学のキャンパスが見えてきた。舗道には夏の花が咲き誇っている。エメラルドと名付けられた通りを進み、林にその道が遮られる手前で車は止まった。「我が家へようこそ。」

庭に白や黄色の花が咲く、小さな白い家－ウッドチャイムが風に静かに揺れ、こぢんまりとした平屋建ての家の中は古いが、手入れが行き届いていた。恐らく家電と呼べるものは勝手口の洗濯機ぐらいでテレビもなく、壁にはArtが描いた油絵とZannieが描いた水彩画が飾ってあった。私はかつて訪れたオルコット家のオーチャード・ハウスを思い出した。「何もなくて驚いたでしょ。でも子供たちは学校から帰ると絵を描いたり、好きな歌を歌ったり、花で首輪を作ったりして楽しんでるわ。」この家にはもう一つ、空気清浄機が寝室で静かに音を立てていた。彼女はひどい鼻炎でこれがないと夜も眠れないそうだ。ユージーンの地形はすり鉢状になっていて、春から夏にかけて大量に散布される農薬が町に降りてくるのが原因だという。この美しい静かな町も『沈黙の春』の白い粉の驚異にさらされているのかも知れないと思った。洗濯機の使い方やゴミの分別法など滞在時の注意点を聞き、荷物を整理しているとMaryが赤かぶのスープを持ってきてくれた。「カンファレンスで夜遅いと思うけど、時間は気にしなくてもいいわ。私たちはここに来て一度もドアに鍵をかけたことがないの。」



Being in the World, Living with the Land

身軽になった私は大学のキャンパスへ向かった。キャンパスの周りは車の通りも少なく、スプリンクラーの音があちこちでシューシューと静かに音を響かせている。時おりリスが歩道を横切っていった。キャンパスでは大会のテーマとともに、そのシンボルであるネイティブ・アメリカンのペトログリフが私を出迎えてくれた。千年以上も前に先住民によって描かれたと言われるこのペトログリフは、皮肉にも50年代にオレゴン州のダムの建設場所から掘り出されなければ私たちが目にすることはなかったものである。大会のメイン会場はCarson Hall－その名前の由来は知るよしもないが、この美しい静かな町でASLEの大会が開かれていることは確かだ。

"I have felt bound by a solemn obligation to do what I could." －Rachel Carson

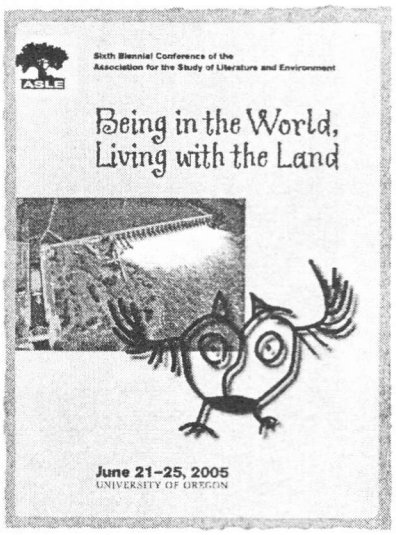
『沈黙の春』がなければここでASLEの大会が開かれることはなかったかもしれないし、私がここに来ることもなかったであろう。

プログラムを開くと、見慣れた名前や言葉が意外と多いのに気が付いた。アジアからの参加者による研究発表、セッションや、アジアの作家や環境思想についての研究発表がページのあちらこちらに散在している。ざっと目を通しただけでも立教大の野田氏による「ロマンティシズム以降のプレゼンティズム」を皮切りに、ネヴァダ大リノ校院生、波戸岡氏による「ピンチョンの*Vineland*に見るカルマ的環境について」、広島大の伊藤氏による「銀盤写真とPoeの新しいヴィジョン」、東京海洋大の三浦氏による「エコディストピア小説と

しての白鯨」、明星大の茅野氏による、アフリカ系アメリカ農民のナラティヴの歴史にもう一つの伝統を見出そうとする試みといった研究発表が見受けられる。名古屋大の加藤氏は60年代学生運動指導者による美しき村の夢について発表を予定していた。また「近代化と文学環境主義におけるアジアの見方」と題したセッションでは野田氏をチェアとし、アレン、高橋、結城の各氏と韓国のKang、Yang二人の学者が名を連ねていた。アジア関連の発表では、ASLE前会長Ian MarshallとMegan Simpsonの２氏による「俳句を脱構築する」という共同発表をはじめ、南カリフォルニア大で学ぶ台湾からの留学生Chou氏による、フレズノで自然農法に取り組む日系３世のネイチャー・ライターDavid Mas Masumotoについての発表も見られた。日本からの発表については別途報告がなされると思うので、ここでは印象に残ったその他の発表について幾つか報告させて頂く。

人も見ぬ春や鏡の裏の梅–松尾芭蕉

有名な芭蕉の一句であるが、この大会において目にするとドキリとする。多くの学者達が、北米を中心に日本、韓国、イギリス、南アフリカなど世界中から集い、「環境」について論じながら実際の環境と向き合っているのだろうか。「学者の研究発表は私には抽象的すぎて」－Maryは反戦や人権、環境といった問題への意識が高く聡明な女性だが、研究発表には少々閉口したようだ。彼女は実際、様々な研究発表やネイチャー・ライターたちのPlenaryに精力的に参加していたが、彼女が関心を持ったのは現実としての環境について語るネイチャー・ライターの言葉であった。



芭蕉のこの俳句を引き合いに俳句と脱構築について論じたのは、先述のMarshallとSimpsonの２氏である。２人の学者が森を歩きながら俳句は脱構築できるかどうか論争するというダイアログ仕立てで発表は始まった。二人が実際山で歩きながら会話をしている様子をスライドで映しながら、「つまらない写真をご覧下さい」と謙遜して見せるMarshall氏に対して、「そうは思わない」とSimpson氏が応戦するダイアログは、人間の表象と表象の外にある存在を見る俳句の是非を体現させる、趣向を凝らした演出であった。

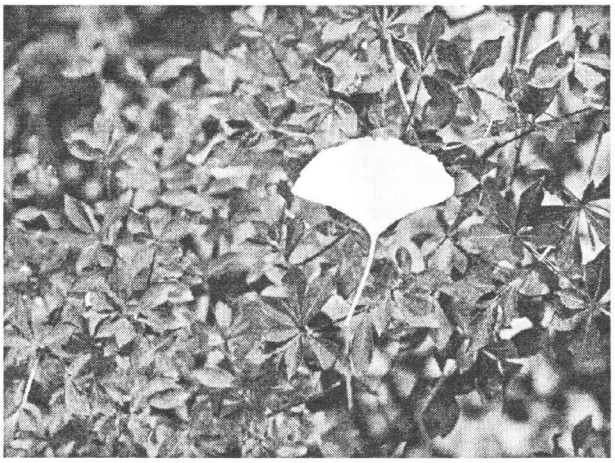
「俳句は言葉を中断させることによって意味されるものの源泉に触れようとする。俳句は思想ではなく出来事だ」と『記号の帝国』で語ったロラン・バルト的な立場を演じてみせるSimpson氏に対して、俳句とて表象による人間のassumptionを免れ得ないとするMarshall氏の批判は、そのまま芭蕉の俳句が示唆する、鏡に映された表象をみる人の視線と鏡の裏に彫られた意識の外にある自然の存在、さらにその意識の外にある自然さえもが刻まれることで表象されている事実の並列を私たちがどう理解するかという問題を問うていた。議論がいわゆる「言葉の戯れ」の問題に終始しなかったのはこの大会らしく、２人のダイアログは最後に意識の外にある実在する自然の存在に向けられた。

惜しむべくは、俳句が言葉を中断することで触れようとする、意味されるものの源泉について議論が展開されなかったことだ。バルトが出来事と読んだ俳句は、表象の外にある存在を意識し、その意識のさらに外にある存在とのコンタクト、縁起の世界であり、そこにはなかったはずのものがここにあり、あったはずのものがここにないという矛盾が同時に成り立つ生成と生滅、そして因縁という関係性があるはずで、俳句をめぐるエコロジカルな議論はここから展開されうると私は思った。

矛盾と向き合う

Maryの関心がもっとより現実的な環境と人間との関わりに向けられていた事実はこの場で真摯に受け止められねばならないと感じた。必要に迫られて形成されたはずの環境批評のフレームワークは常に後付けであり、はじめに理論ありきではないはずだ。環境批評はともすると空中楼閣化するベクトルを常に地に押し戻す、自己批判的、弁証的な運動に違いない。そんなことを考えながら、ネイチャー・ライティングでも、その批評でもない、批評を批評し、理論化するエコクリティシズム批評のセッションに顔を出した。

London College of Music and Mediaの John Parhamは*Romantic Ecology*を書いたJonathan Bateを引き合いに、環境批評をめぐる英国における立場、視点の紹介を通して氏の言うところの“utile ecocriticism”について説明を試みた。彼はまず*Romantic Ecology*でBateが示した環境という視点からのロマンティシズム再評価という立場を、Bate自身が2000年に出した*Song of the Earth*において超克していることを指摘。Bateの関心はWordsworthからHeideggerへと向けられ、自然のrefugeはpoetryの中に見いだされなくてはならないとするHeideggerの“eco-poetic”にその理想を見るとする。“eco-poetic”が提起するのは、テクノロジー、地球に住まうと言うことはどういうことか、詩人は何のためにあるかという問いであり、それ故*Song of the Earth*は環境批評におけるロマン主義的調和の強調であり、政治的側面を無視しているとする。Parham氏はBateの論に対置して、Romanticismと政治の再接続を試みたE. P. Thompsonを挙げ、経済の成長ではなく、satisfaction, fulfillmentを人間の要求と見ることで持続可能な社会としてのimagined societyを提唱するThompsonをエコロジーの歴史家として評価すべきだとした。Thompsonについての知識は皆無であるが、Parham氏がいうように、Bateの議論がイデオロギー批評に終始した80年代以降のマルクス主義的ロマン主義批判に対する反論であることを踏まえ、“harms to the one, harms to all”とcommonwealthを強調しつつマルクス主義がその唯物論的側面性ゆえ欠いていたimaginationやdesireの必要性を説くThompsonの考え方は興味深く聞こえた。



リーズ大学のTerry Giffordはパストラルの観点からエコクリティシズムについて論じた。Leo Marxは1964年にcomplex pastoralとsentimental pastoralを区別したが、アメリカのネイチャー・ライターの誰もsentimental pastoralを使おうとしなかったとGifford氏は指摘し、今後のパストラルのあり方としてPost pastoralの可能性を提唱する。そのためにGifford氏はまず、エコクリティシズムにおける、Dana PhillipsやMichael Cohenらの最近の動向を少し行き過ぎていると批判する。エコクリティシズムは何のためにあるのか。環境をめぐる緊急性がエコクリティシズムを論争の渦に巻き込んでいるのだ。自分たち地球上に住まう種の一つとして振る舞いを変えることで持続可能な調和のある惑星に住むことができるのであると氏は語る。Phillipsはこれをユートピアンと評するかもしれない。確かにそうだが、ユートピアのはっきりした静的なヴィジョンを持たないことで、対話の余地が開かれているユートピアであるというのがGifford氏の主張である。私たちに必要なのは人間中心的責任なのか、それとも環境中心的責任なのか—Gifford氏は問いを立て、この対立を乗り越える一つの考え方として複数の主観性の中で共通に成り立つ視点のあり方、相互主観性を挙げている。エコクリティシズムをめぐる論議の見通しを示すには時間をみる必要があり、そこにはその道徳的資質を含んだ人間の経験の質が問われるとする。これは一つのactivismであり、教える、そして書くという行為はそれゆえactivismであると語っていた。

ネヴァダ大学リノ校のMichael Cohenの発表は、風当たりの強さを想定してか(?)、時には消え入る声で、時には雄弁にいっきにまくしたてるために英語の弱い私には聞き取りづらかったが、エコクリティシズムにおけるメディア・リテラシーの欠如を批判しているように聞こえた。Rick Bassの最新作、*Coda*を引き合いに、自然の中に自然の社会を読み、秩序の美を見ようとするBassの自然への共感に神々のintelligent designへの希求が刷り込まれていることを指摘し、実はこのことが最近の自然をめぐる論議のテーマとなっていることを指摘する。アカデミズムにおいて我々は、学生が既存のものにかわる別の手段を理解するよう促しているが、私たちが考えなければならないのは、その手段とはいったい何なのかということである。科学は、いわばネイチャー・ライティングであり、セオリーが抽象概念化であるという点において一つの文化的構造であるという前提を無視した結果、結局は盲目的に自然を権威として理解してしまうことに警笛を発するというスタンスでCohen氏はエコクリティシズム、そしてその共同体であるASLEを批判しているようで

あった。

Cohen 氏のエコクリティシズムや ASLE に対するある意味でのイデオロギー批評は、エコクリティシズム自体を陳腐化してしまう危険を孕むのか、それとも、彼の言うように自然という文化的規範が刷り込まれているゆえに批判的側面に欠けるむきのあるエコクリティシズムにバランスを与えているのか、彼のスタンス自体、評価が難しいと感じた。例えば Mary は、Snyder の Plenary に参加してみて会場に異様な雰囲気を感じたと後で語っていたが、彼女は環境というイデオロギーを共にする ASLE に一種宗教的側面を感じ取ったのかもしれない。もっとも Mary は Snyder の話しぶりや朗読する詩自体あまりお気に召さなかったようで、余計に会場にあった Snyder 賞賛の空気に違和感を憶えたというのが実のところだろうか。

未来への希望

National Public Radio で環境問題を取材してきたジャーナリスト、Alan Weisman による南米コロンビアの小さな村、Gaviotas における持続可能な社会を目指す環境への取り組みのルポルタージュは感動的なものであった。彼は、世界最大の麻薬地帯そしてアメリカへの麻薬の供給源としても知られる南米コロンビア、麻薬組織が闊歩する地方の貧しい村で、科学者、エンジニアや植物学者、農業指導者、ミュージシャンや医師、教師、学生らが一体となって村を自活できる、環境的にも持続可能な社会にすべく取り組む姿を克明に追い、そこに「地上の天国」を見、一つの未来の理想の姿を提示してみせた。そこでは科学者は太陽熱発電で村の最低限のエネルギーを供給し、エンジニアは子供がシーソーを楽しみながら水をくみ上げることができるポンプ式井戸を考案、教師や学生のボランティアは村に必要な教育を提供していた。人々の知恵と工夫、そして何よりも熱意が未来を変える原動力となることを Weisman 氏は自らの体験をもとに提示し、このささやかな成功が地球全体の未来への大きな成功の足がかりになることを示唆していた。Plenary の後、会場からは聴衆が総立ちで、賞賛の拍手はしばらく鳴りやむことはなかった。彼が著した本の売り場には長蛇の列ができ、多くの人は売り切れのために彼の本を別途注文しなくてはならないほどであった。

自身の心の意識の流れを綴った日記のような詩や小説をエモーショナルに詠み上げたのは、メキシコ系アメリカ人 Ana Castillo である。メキシコ系移民である主人公のアイデンティティを形成する二つの側面、自身のルーツ、文化的、民族的背景と、劣悪な生活環境がもたらした身体の障害を、自らが持つ自由の利かない自然として顕在化してみせる一方で、マイノリティが置かれた環境に起因する人種差別的問題を示唆する。シリアスな問題をユーモアとアイロニーと怒りを交えながら情熱的に歌い上げる Castillo 氏の言葉は間違いなく聴衆の心を動かしていた。また、Jane Hirshfield は禅の瞑想を思わせる自省的な心理描写を詩の朗読でチャーミングに披露していたのが Plenary の中では印象に残った。

最後に

卓越した発表の数々に加え、著名な作家達による詩やエッセイの朗読、オレゴンの自然を堪能するエクスカージョン(私は参加しなかったが)、が充実したものであることは、最終的に発表された 700 人を越える参加者の数が物語っていると思う。しかしながら問題もないわけではなかった。できるだけ発表を受け入れるという大会の方針に、いくつもの部屋で人が入りきれずに溢れ、希望する発表が聞けないことが何度かあった。またそういったスケジュールによる、かなりの時間の制約から窮屈な思いをした発表者や聴衆は多かったはずで、大会のクオリティを維持する上でも事務局は今後の課題として検討する必要があると感じた。帰りはまたも自然の悪戯で、サンフランシスコへの飛行機の出発が遅れてしまった。そのためか、ユージーン空港で飛行機に預けたはずの旅行の荷物はうまく成田行きの便に引き継がれず、私の荷物はサンフランシスコで私より一日長いアメリカの滞在を楽しむことになった。

これまでに述べた大会の模様については私の私見に基づくものであり、私の英語力の欠如とエコクリティシズムについての勉強を怠たってきたつけが、甚だしい誤解をもたらしている可能性があり、ついては厳しいご批判とご訂正、ご意見を頂けると幸いである。■

ASLE-US オレゴン大会分科会報告

（第１日、2005 年 6 月 21 日）

波戸岡景太（ネヴァダ大学リノ校、Visiting Researcher）

「太平洋側北西部」と題されたパネルでは、私を含めた４人のパネリストが、フィクション研究、ノンフィクション研究、そして実際の森林調査というそれぞれに異なるフィールドから、北カリフォルニア、オレゴン、ワシントンの〈自然〉を論じた。パネルの最後となった私は、トマス・ピンチョンの『ヴァインランド』(1990) を採り上げ、なかでも、太平洋岸に広がるレッドウッドとそこに生息するという伝説上の生物ビッグ・フットを扱ったエピソードに着目し、ピンチョン特有のアナクロニスティックな小説世界に立ち現れる〈自然〉を紹介した。発表のタイトルは、アニー・ディラードの『ティンカー・クリークのほとりで』(1974) から、「シェード・クリークのほとりで」(Pilgrim at Shade Creek) としたが、その意図は、ネイチャー・ライティングとポストモダン小説のジャンル横断にあった。『ヴァインランド』というポストモダン小説（正確には、『V.』(1961) や『重力の虹』(1973) のようなピンチョンの代表的ポストモダン小説とはまったく様相の異なった、60 年代をノスタルジックに描くパロディ精神に溢れたドタバタ小説）に描かれた虚構の〈自然〉を、あたかもネイチャー・ライティングを読み解くかのように、現実の〈自然〉を小説の背景に想定しつつ再解釈してみること。実は、本発表に先立ち、私は一週間ほど北カリフォルニア沿岸の調査旅行を行った。小説の舞台となっている「ヴァインランド」は、北カリフォルニアのどこかに存在するとされる架空の町と郡の呼び名だ。けれども、巨大な針葉樹レッドウッドが繁茂する現実の国立公園や州立公園、そして、それらをつなぐハイウェイ沿いのリザベーションや小さな町々をまわっていくうちに、『ヴァイランド』という作品が、ほかでもない、北カリフォルニアという場所そのものをパロディ化した物語だったことに気づかされた。つまり、その場所に特有な〈人間〉と〈自然〉の関係を知ることなしに、『ヴァインランド』という虚構世界を読み解くことは、片手落ち以外の何ものでもないことが分かったのである。小説世界の外と内の〈自然〉。このような視点からの研究発表を行う場として、ASLE ほど最適な学会はなかったように思う。それぞれに領域の異なる研究者たちの共通テキストが「太平洋側北西部」であるというのもユニークだが、小説の外と内を行き来しながら、彼らと対話が出来たことは何よりの収穫であった。■

ASLE-US オレゴン大会分科会報告

（2005 年 6 月 21 日〜25 日）

南部文学とアフリカ系アメリカ人文学に関する発表を中心に

茅野佳子（明星大学）

初夏のオレゴン大学のキャンパスは緑が美しく天候にも恵まれたが、飛び交う花粉に悩まされた５日間でもあった。キャンパス近くの店で花粉症の薬を買うとき、店員に “Welcome to Oregon!” と言われたのが印象的だった。９つの全体会と１４０のパネル発表が行われたが、その中からアメリカ南部文学とアフリカ系アメリカ人文学をテーマとするセッションを中心に報告したいと思う。

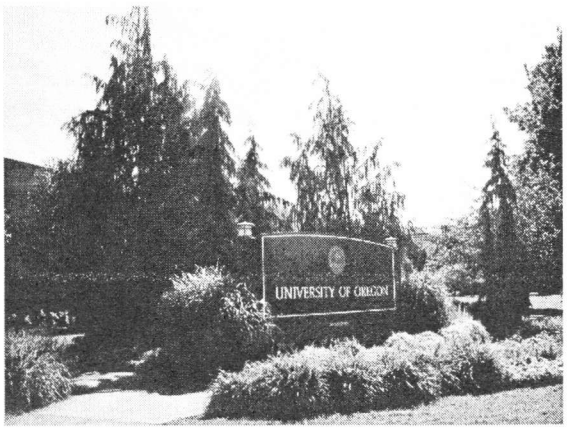
まず、二日目に行われたパネル・セッション “Down in Dixie” では、三人の発表者がそれぞれ南部のフィクション、歴史、ノンフィクションを環境文学の視点から考察し、今後の南部文学研究に新たな視点を提供した。

Kelly Sultzbach (University of Oregon) は、“The Chiasmic Embrace of Rots and Fecundity in Eudra Welty's *Delta Wedding*” と題する発表において、ミシシッピ州デルタ地方を舞台とする Welty の小説 *Delta Wedding* を「環境現象学的読み方 (“ecophenomenological reading”)」で分析し、日々の生活の中で体験する人と人、人と自然の感覚的交

流（“sensory interaction”）や物理的接触による相互作用（“physical interplay”）が、そこに描かれている様々な二項対立的要素を融合させる現象を指摘した。

次に、Jane Archer (Birmingham-Southern College)は、“‘Birmingham was the anvil’: Demythologizing the South as Place”と題する発表において、理想化・ステレオタイプ化された南部のイメージとは異なる現実の「南部」像を、厳しい人種差別と鉄鋼業の町として知られてきたアラバマ州バーミンガムの歴史と現状を通して考察し、「南部」の多様性とその抱える問題の複雑さを訴えた。発表者は、アラバマのアフリカ系アメリカ人が「愛する南部の土地(“our beloved Southern land”)」と言って土地への愛着を表すことを指摘していたが、力を合わせ公民権運動を闘ったコミュニティの力や守り抜いた土地との強いつながりに目を向けることの必要性を、あらためて認識した。

最後に、韓国のDon Oh Choi (Chungnam National University)は、“Searching for Another Deep Landscape: Ecocriticism and Southern Nonfiction Writing”と題する発表において、従来環境文学研究が南部を取り上げなかった原因の一つに、南部が自然環境の問題よりも重要な社会問題を抱えていたことを挙げ、Janisse RayやJames Kilgoといった南部のノンフィクション作家が、南部の自然環境や生活を描写し、人権問題と環境問題の接点を扱っていることを指摘し、それぞれの作品を紹介した。



最終日に行われたパネル・セッション“African Americans on the Land and on the Page”では、三人の発表者がアフリカ系アメリカ人作家によるフィクションとノンフィクションを取り上げ、そこに描かれた農業及び農民の生活、人種・環境の問題、そして論争の場としてのテクストにおける修辞法の伝統について考察した。いずれの発表も、最近環境文学の視点から取り上げられるようになってきたアフリカ系アメリカ人文学に多様な角度からのアプローチを試みたものであった。

まず、Scott Hicks (Vanderbilt University)は、“‘Who the Hell Will Work for the Farm?’: Agriculture, Nature, and Race in Fiction of George W. Lee and Zora Neale Hurston”と題する発表において、同時代に書かれた二人の作家の作品を紹介し、そこに南部の物納小作制度(sharecropping)と綿花の単一栽培が土地と小作農に及ぼした悪影響や悲劇的結末が描かれていること、白人の作り上げたイデオロギーやステレオタイプへの挑戦が見られること、そして移動や多種作物栽培による解放が提示されていることを指摘した。

次に茅野(明星大学)が、“‘To Carry in Our Hearts Their Affection for the Land’: Exploring ‘Another Tradition’ in Narrative History of African American Farmers”と題する発表の中で、三人の南部出身のアフリカ系アメリカ人によるナラティヴ形式のノンフィクションを取り上げ、そこに描かれる農民の暮らし、土地との強い結びつき、代々受け継がれた農業の実践、土地を守る闘い等に着目し、奴隷制時代から現在まで続くアフリカ系アメリカ人の「エコロジカルな遺産(“ecolegacy”)」について考察した。

最後にDaniel J. Martin (Rockhurst University)は、“Nonfiction Writing for Environmental Justice”と題する発表において、Frederick DouglassやFrancis Ellen Watkins Harperのスピーチと、環境公正を訴えるRobert D. Bullardのノンフィクションを比較・分析することで、そこに共通して見られる比喩(例：人権や環境の問題が生死に関わることから、戦争の比喩が多く使われていること)や修辞的特徴(例：旧約聖書のエレミヤ書のパターンがよく使われること)とその効果を指摘し

た。

他のセッションでも印象的な発表があった。Levita Mondie は、“Mfinda” と呼ばれるアフリカ（特にコンゴ）の伝統的な全体論的世界観（“holistic world view”）を紹介し、Charles Chestnut の古典的代表作 *The Conjure Woman* の中で語られる動植物と黒人奴隷の物語にこの世界観が見られることを指摘し、アフリカ系アメリカ人の口承物語が環境文学であることを主張した。また、アメリカ先住民文学をテーマとするセッションで Susan Berry Brill de Ramirez は、Simon Ortiz の詩における「語ること」と「耳を傾けること」の意味を、原稿なしで発表者自身が直接聴衆に語りかける、いわば「ナラティヴ・プレゼンテーション」とも呼べる方法で効果的に伝えた。この発表を聞いていて、４年前の大会の基調講演で、Ortiz 自身が↗

↘詩を朗読しそれにまつわる話を語ったときに感じた力強いエネルギーの循環を再び感じ、環境文学批評において「語り」が大きな力をもつことを再認識した。

最後に、基調講演の中で印象的だったものをひとつ紹介したい。メキシコ国境地帯についての著書のある Alan Weisman が、南米でももっとも危険な国と言われるコロンビアで奇跡的に見つけた Gaviota という共同体について語った。そこでは、正式な教育を受けることなく身近にあるものを利用する術を知っている地元の人々が、土地や自然を破壊することなく、人間の暮らす環境を改善しながら暮らしている。Weisman は、Gaviota の住民を “visionary” と形容し、作家にできることはこうした人々の起こした「奇跡」を発見し、それを伝えることだと述べていた。■

ASLE-US オレゴン大会分科会報告

（第４日、2005 年６月 24 日）

三浦笙子（東京海洋大学）

第６回 ASLE-US 大会の４日目、2005 年６月 24 日に私が発表したＨ６分会は、事前に９項目提案された発表課題の内の一つ、Eco-utopias and Dystopias がテーマでした。To Hell in a Handbasket: Ecodystopias という題名が与えられ、Mark Allister 氏が司会者でした。アーネスト・カレンバックの『エコトピア』が 1975 年に世に出て以来、エコディストピア、つまり地球の滅亡を語るテーマは、古典から SF まで、様々な作家の想像力を刺激してきました。

Ｈ６分会の発表者は三名。ルイジアナ・センテナリー大学のジーン・ハミングさんはヴォネガットの『The Big Space Fuck』について、ドイツのマンハイム大学のクリスティーナ・グレーヴェ・ヴォルプさんはマーガレット・アットウッドの『Oryx and Crake』について、そして私はハーマン・メルヴィルの『白鯨』についての発表でした。

持ち時間は僅か 15 分。朝の８時開始の時間帯↗

↘でしたが、部屋には意外に視聴者が集まっていて、有難く思いました。私には初めての米国 ASLE でしたが、総勢 670 名の巨大な大会でありながら、組織管理は幹事であるオレゴン大学のアリソン・ウォレス ASLE-US 会長の支持によって素晴らしく行き届いていました。同じ時間帯に約１０種類の分会がオレゴン大学の広いキャンパスの教室で同時進行していて、一日に４回のセッションが開かれ、次々と興味をそそるワークショップ・発表・講演が行われ、充実した５日間でした。

私の発表の前後が前記の非常に新しい SF 作家の研究発表でした。お二人の研究は前衛的なファンタジーで環境破壊による黙示録的な未来を語る作品についてで、非常に刺激的でした。私の発表は「エコディストピア小説としてのメルヴィルの『モービィ・ディック』」という題名で、ピークォッド号をエコディストピアと見なし、フェダッラーの予言を有機的アイコンで表した意味を解明する研究でした。全員の発表が終わって、３人が持ち時間通りに終わったので、質疑応答の時間は 30 分ほどあったのですが、幸い会場から質問が相次ぎました。私の発表で触れたキャロリン・マーチャントの『Reinventing Eden』についても意見交換が活発で、頼もしく思いました。

オレゴン州の美しい山も海岸も、よい思い出になりましたが、プレナリー・セッションで講演したUrsula Le Guin・Karl Kroeber兄妹の上品なウィット、Gary SnyderとAna Castilloの美しい詩の朗読は特に心に残りました。■

ASLE-USオレゴン大会分科会報告

（第6日、2005年6月26日）

高橋　勤（九州大学）

今年の六月オレゴン大学で開催されたアズリー大会で、韓国の研究者と合同でパネルをもつ機会があった。ことの発端は、当時リノに滞在されていた立教大学の野田先生の計らいにより、同僚の韓国の研究者と「アジア」をテーマにしたパネルが発案されたことだった。韓国側からはGyu Han Kang氏とSun Kap Yang氏がパネルに加わられ、日本からはブルース・アレン、結城正美の両氏と私が参加した。

この大会では、五日間の日程に一四〇を超えるパネルが組まれていた。はたして、われわれのパネルに何名の聴衆が集まるだろうか、と訝ったのだが↗

↘どっこい、ラウンジ風の会場には三〇名近い聴衆が詰めかけてくれたのだった。日本からの応援も嬉しかったが、元アズリー会長のSueEllen Campbell氏らの来聴は殊更ありがたかった。

野田先生によるテーマの紹介につづいて、カン氏は韓国におけるソロー研究の現状の説明と、『ウォールデン』における自然表象の問題点を指摘された。Yang氏は、韓国の詩人Yun Don Juの自然観について“humility”と“modesty”という語をキーワードとして説明された。アレン氏は石牟礼道子の『天湖』の翻訳をとおして経験された言語と語りの問題点をエコロジー思想の観点から提示され、結城氏は現代作家田口ランディの作品におけるサウンドスケープについて論じられた。私は日本における環境文学と社会主義の関連性について田中正造を取り上げて説明した。

質疑応答も活発に行われ、この種のパネルとしては非常にうまくいったシンポジウムであったと思う。一つだけ心残りであったことは、「アジアの近代」というテーマについてパネルをとおして考察を深めることができなかったこと、そして日韓の研究者との間で相互に意見のやりとりができなかったことである。今後の課題としたい。■

ASLE-USオレゴン大会分科会報告

（第6日、2005年6月26日）

山城　新（琉球大学）

“Animal Villains, Animal Victims”というテーマでまとめられた分科会について各報告を発表順で紹介したい。

“When Villains Become Victims: Sharks, Aquatic Animals, and Sea Ethics in American Literature”というタイトルで山城は映画『ジョーズ』で知られるどう猛な鮫の表象は、アメリカ文学作品の伝統の中でどのように位置づけられるかをアメリカ環境思想に照らし合わせながら説明した。植民地文学では鮫は食肉として、荒々しいウィルダネスの中の↗

↘野性を表すものとして描かれていたが、19世紀、20世紀を経て、ヘミングウェイ、ジェームズ・ディッキーらの作家は鮫を消費される商品として描き、そして『ジョーズ』の作者であるピーター・ベンチュリーをはじめとする現代作家たちは鮫の保護を訴えている。あまり文学では論じられることがない海洋生物の表象分析をしながら、環境文学研究における海環境への視点の必要性を提言した。

アイダホ州アルバートソンカレッジのRob StacyとPamela J. Lassiterは“The Stallion's Wife: Reflecting the Legacy of Violence in the Horse-Human Relationship”という発表で人間と馬の関係について共同発表をした。一方が理論的議論を展開し、もう一方が創作した自らのストーリーを朗読するという、最近の学会でしばしば目にする共同発表の形式であった。Rob Stacyはアビーらの北米南西部を代表するネイチャーライターがどのよ

うに馬を描くかを具体的な作品分析をとおして発表し、Pamela J. Lassiter は馬の死をめぐる個人的な体験を語ったのだが、両者の発表は馬の「死」と人間の「(馬に対する) 暴力」について、特に動物倫理的側面に議論の重点を置いていた。

インディアナ大学大学院の Tobia Menely は 18 世紀イギリスにおける動物の餌づけについて歴史的及び社会的文脈を説明した。特に、イギリスで上流の文化が発達する際に、プロテスタント的教義や新しい人道主義的立場が影響し合い、動物愛護の思想が餌づけという習慣に影響を与え、イギリスで動物愛護に関する法律は 19 世紀中庸までに整備されたという。Menely の発表はそのような歴史的経緯を説明するだけではなく、ロラン・バルドからミシェル・フーコーなどの理論を駆使しつつ、「他者」への認識がどのように獲得していくか・いくべきかという倫理的な考察へも発展していった点で、興味深かった。

オハイオ州デニソン大学 Priscilla Paton は映画、テレビ、そして文学における子鹿のバンビの表象について分析した。分析する際に鹿がどのようにアメリカ環境保護運動の中で位置付けされていたかを説明しながら、各種メディアで動物が描かれる際の問題点などについて指摘した。その中の一つは動物の死の受け止め方の問題である。ディズニー映画の中でバンビの母親が死ぬ際にその死は非常にセンチメンタルな描かれ方をしている。しかしながら鹿を間引くことは生態系を維持するためには必要であり、安易な「死」への同情は逆に誤った自然観へと繋がる危険性もあるということである。■

第11回 ASLE-Japan 文学/環境学会全国大会

2005年10月16-7日

札幌大会報告　高田宏講演会

高橋　勤（九州大学）

今回の講演には、作家の高田宏氏をお招きした。会員である乳井さんの計らいもあり、著名な作家をお招きできたのは望外の喜びだった。テーマについては、とりあえず「北海道の自然と文学」としておきます、と依頼状を差し上げると、すぐさま返信が届き、知里幸恵、啄木、独歩、伊藤整など、北海道ゆかりの作家について、幅広く話をしたい、との連絡だった。

講演は、期待どおり、充実した内容だった。文学的な洞察と、さまざまなエピソードを交えて行われた講演の中で、とくに私の印象に残ったのは、天売島のエピソードだった。島の老人とその孫に案内されて磯の洞窟を訪ねた高田氏は、清水のわく泉の在り処を教えられる。その際、氏は「暮らしのなかの文化力」という言葉を用いられた。暮らしのなかに息づき、世代をこえて伝承される文化の力。文化とは、学校で学ぶものでもなく、西洋から一方的に伝わるものでもない。日々のくり返しの中からしみ出し、想像されるものであったのだ。

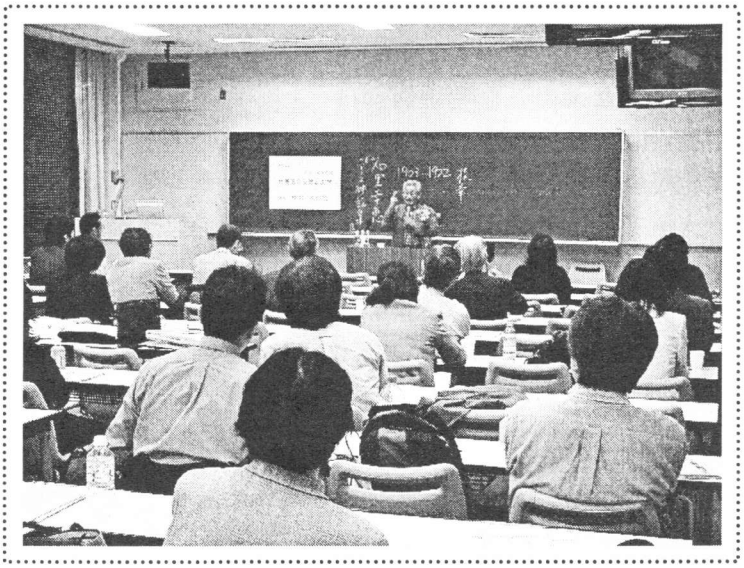
この言葉を聞いたとき、私は現代において、いかにこの文化力が衰退しているかを痛感した。東京や大阪などの大都会の話ではない。地方において、自然や風土の豊かであるべき地方において、この文化力はもっとも疲弊しているのだった。次の時代を生きる子供たちに何を教えるか、どういう価値を伝えるか、これは世界が抱えるもっとも深刻な問題だろう。

高田氏は、講演の冒頭で、北海道の自然について語るとき、「まず先住民であるアイヌへの敬意を欠いてはならぬ」とおっしゃった。そして、知里幸恵の『アイヌ神謡集』を取りあげられた。宗教観念にみたされた魂から流れ出す「しずく」のようなユーカラのことばと、一九歳で夭折したこの詩人のいのちとが重なって見えた。

いっぽう、北海道の自然は、内なる野性を目覚めさせるような雪と氷の大地でもある。紋別の近くの枝幸と

いう町を訪ねた氏は、氷結した湖の上を「白熊になったように」スノーモービルを走らせる。オホーツクの港町はまた、流氷に賭けを挑みつつ漁をする男達の世界でもある。この「流氷文化」において、メガネとネクタイ姿の会社員は女にはモテない。

高田氏の話はわき出す泉のように尽きるところがなかった。伊藤整の『雪明りの路』にみられる「雪恋い」、武田泰淳の「ひかりごけ」における知床の人肉食の真相、猪谷六合雄の『雪に生きる』の「ほがらかさ」、北海道の威嚇的な自然に違和感を抱き、武蔵野の雑木林に自然を「発見」した国木田独歩。「北海道の自然と文学」についての断想は尽きることがなく、二時間という時間の制約をもっとも不満に感じられたのは、高田氏御自身ではなかっただろうか。投げかけられた言葉の一つひとつは、聴者の心にしみ通り、新たな思想を醸成する機会となったことだろう。



多忙の中御講演いただいた高田氏には、心から感謝し、また更なる健筆を期待したい。■

札幌大会研究発表報告

(午前の部)

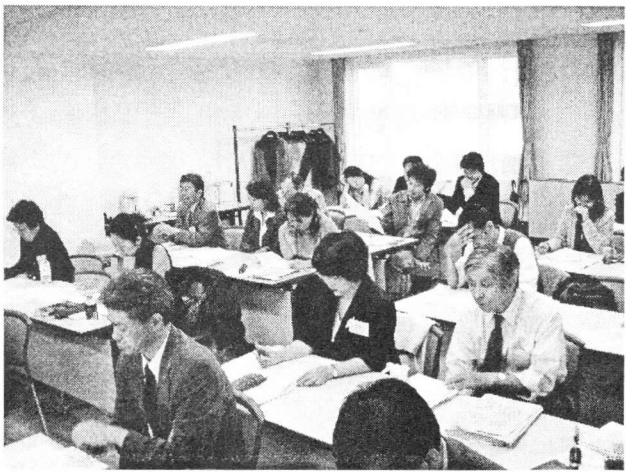
小谷一明（新潟女子短期大学）

川谷弘子氏（中央大学・院）による「引き裂かれた大地－第一次世界大戦物語における大地表象を探る」の発表においては、第一次世界大戦を描くメアリー・ボーデン (Mary Borden)『禁じられた地帯』(*The Forbidden Zone*) (1929)が主に論じられた。戦争表象に関わる作品としてはヘミングウェイなど男性作家によるものが多く論じられているが、川谷氏はボーデンの作品を通して第一次世界大戦の大地表象（大地の声）を「失われた世代」ナラティヴにたいし並置する。フランスの野戦病院で病院長、看護師として活動したボーデンは、いわゆる女性の権利獲得に帰着する「病院物語」とは異なり、戦場の泥濘の目線で戦争を描く。それゆえ兵士に視点を合わせるばかりの戦争表象とは異なり、犠牲者と↗↘してのベルギーの大地表象を、泥や小糠雨(thin rain)といった「断片」から読みとることができる。ボーデンが敵味方の区別を超える、泥雨の視点から戦争を見つめたことで、戦争を押しつけられた大地の前景化が可能になった。引き裂かれた大地の継ぎ接ぎにより声を回帰させ、「失われた世代」の戦争表象を相対化する分析に感銘を受けた。

山本洋平氏（立教大学・院）による「『必然』が産む文体－ソロー、ディラード、ネルソン、動物遭遇譚」の発表では、動物の行動様式や野生を言語化しようとする点と、人間との関係を通して動物を描き人間を相対化する点に、ネイチャー・ライターの力量を測る基点があると論じられた。ソローの『森の生活』においては、世界や文明に不定冠詞をつけるなど動物の世界と共感覚の関係を築きたい指向性が生まれる一方、その差異を即時的に提示する言語と言語化された感覚の限界が、葛藤となりテキストに浮かび上がる。ネルソンの『内なる島』では犬のシュナックをとおして貂を描き、人間を周縁化している一方で、作者は自らを捕食者と位置づけながら場所との親密な関係を求めようとする。ディラードのエッセイ「いたちの生き方」では、作者は動物

との相互依存という観点で作品の一人称から離れ、'Seize it and let it seize you' といった表現のように、構成と文体で「他者」に接近しようとする。山本氏は、言語表象により人間中心ではない表象実践を試みるネイチャー・ライティングの特質を鮮明に浮かび上がらせた。

松岡幸司氏（立教大学）は「シュティフターの作品における「場所の感覚」について－「みかげ石」における空間的・時間的な感覚」の発表で、19世紀オーストリアの画家兼作家であるシュティフター著「みかげ石」の描き出す祖父と孫の散策を、場所の感覚の形成過程として分析した。祖父から孫（作家シュテイフターであり語り手として考えることができる）への語りにおいては、近景と遠景の指し示しと、災厄など過去の物語が並び進む。その際の、祖父の「覚えておきなさい」という表現で意図される空間的な固定化では、指し示される個々の景観が外部の想起へとつながることで、空間的な奥行きが付与される。さらに祖父の語りにおいては物語としての過去が現在に再存在することで、時間的な奥行きも形成される。こうした奥行き形成の旅程はみかげ石を出発・帰着点とするが、みかげ石は固定点であると同時に全方位的なシンボルとして機能している。連続的な時空間における場所の感覚という観点から、「故郷」の形成過程を詳細に跡づけることで、松岡氏はシュティフターの自然描写に環境教育の側面を読みとる可能性を提示した。■



札幌大会研究発表報告

（午後の部）

山城　新（琉球大学）

浅井千晶氏（千里金蘭大学）による「Olive Schreinerと南アフリカの風景－*The Story of an African Farm*を中心に」と題した発表はオリーブ・シュライナー（Olive Schreiner）という南アフリカ植民地出身の作家の紹介とその作品、特に*The Story of An African Farm*（『アフリカ農場物語』）の中に見ることのできる作者とラルフ・ウォルドー・エマソンとの思想的類似性を指摘し、更に両者の間の相違点についてシュライナーに影響を与えたアフリカの原風景の意義について指摘した。作中にイメージを多用し、ロマン主義と実証主義的立場が混在するという作者の立場は、キリスト教的世界観にも相反するようになるという。「一貫性を欠き」そして「残忍性」を秘めた自然と向き合うことで自己を発見しようとするとき、故郷であるアフリカとその自然へ向かい合うことはシュライナーとって必然的であった。エマソンの超絶的立場との思想的別離がなぜ起きたのか、ダーウィニズムとの関連はあったのか等の質疑応答が活発に交わされ、環境文学批評が植民地文学、フェミニズム、そしてアフリカ地域まで応用できる可能性を示唆しつつ、フロアにとっても刺激的な発表であった。

現実と妄想の間の奇想（マゴット）に満ちた世界を描く作家として、あるいは、ストーンヘンジの保存について積極的に発言することで環境保護主義者としての一面も備えているイギリス作家として、ジョン・ファウルズは一般的に知られていたかもしれない。しかし、「森の奇想－ジョン・ファウルズの小説と自然」と題した有為楠泉氏（名古屋工業大学）の発表はファウルズ作品を理解する際に自然環境の果たしている役割を理解することがいかに重要であるかを作品の中で説明し、作家の一般的理解を大きく修正したといえるのではないだろうか。ポストモダニストとしての作者の描く世界の難解さ

は、実は西洋近代の中で膨張した人間の理不尽さ、あるいは不確実さを写したものであり、しばしば描かれる奇想に満ちた洞穴や森などの自然表象は「不可思議で」「荒々しく」そして「神秘性を備えた」存在として、近代知識の枠組みでは捉えられない知的認識を重視する作者の立場の表れだという。なるほど「何度も何度も言っているのだが、私の小説を理解する重要な鍵は、私と自然との関係にある。」というファウルズの言葉はファウルズが自然と小説の統合を企図したことを十分に示すものだが、同時に、当時のイギリス作家たちの作品と環境文学的観点の一脈的な相関性を説明したともいえるだろう。因みにファウルズは大会の数週間後の 11 月 5 日に亡くなったそうである。享年 79 歳。BBC のニュースサイトで追悼記事が掲載されている。■

http://news.bbc.co.uk/1/hi/entertainment/arts/2880967.stm

シンポジウム

「国立公園と文学」報告

上岡克己（高知大学）

乳井昌史氏の司会のもと、上岡克己氏による「アメリカの国立公園とアビーの文学」、小田島護氏による「日本の国立公園と行政」、ブルース・アレン氏による「日本人と自然」の発表があり、ひきつづいてフロアとの活発な議論が交わされた。

上岡氏はエドワード・アビー著『砂の楽園』を取り上げ、この作品中に国立公園の理念や諸問題が凝縮されていることを指摘し、特に場所の感覚に精通したパークレインジャーを語り手に採用したことで、アメリカ文学に新しいヒーローが登場したことを高く評価した。

小田島氏は日本の国立公園の現状に鋭くメスを入れ、国立公園内に存在する国有林の管理・運営について、林野庁の政策を批判した。また国立公園の楽しみ方について、日米の違いを指摘し、「利用」と「保護」という古くて新しい問題を提起した。

ブルース・アレン氏は個人的な体験を交えながら、日本人と自然とのかかわりについて語った。伝統的な日本人の自然との接し方は、自然に対して特別な愛情をもったものであったが、最近の学生を見ていると、そのような関心自体が希薄になってきていると指摘する。過度の商業主義やグローバリゼイションの中で、自然に対する概念そのものが変質していることを懸念しながらも、このような時代だからこそ、ささやかであるが文学の秘められた可能性に期待したいと語り、フロアからの賛同を得た。

「国立公園と文学」という範疇には収まりきれないシンポジウムとなったが、日米の国立公園の相違から、日本では国立公園という概念そのものがまだ十分な市民権を得ていないという危惧が表明された。今回のようなシンポジウムを通して、日本における国立公園の意義について発信していく必要性を痛切に感じた。■

書誌情報

鈴木晃仁・石塚久郎編 『食餌の技法　身体医文化論Ⅳ』(慶應義塾大学出版会、2005)

最近注目を浴びている、食に関する人文・社会学的アプローチの視点からの論が収められている。浅井千晶「クック家の悲劇――生産神話の崩壊」は、ジェイン・スマイリーの小説『千エーカー』(1991)をエコフェミニズムの理論で考察している。(上岡)

『接続』刊行会 『接続　5』(ひつじ書房、2005)

「環境というトポス」が特集として組まれている。「レイク・タホにみる環境保全の知恵」や「セントラル・パークという〈自然〉」という興味深い論も収められている。茅野佳子「場所・人間・文学――アメリカ南西部の文学と環境公正運動」は、アメリカ南西部の文学を幅広い視点から考察している。(上岡)

村串仁三郎 『国立公園成立史の研究――開発と自然保護の確執を中心に』(法政大学出版局、2005)

日本の国立公園史、特に国立公園誕生前後の状況を詳細に論じた研究書。この分野の研究書が少ないなか、貴重な書である。アメリカの国立公園の多くが民衆の支持をえて造られたのに対し、日本の国立公園は官営というニュアンスから離れられない。(上岡)

大森義彦 『アメリカ南西部メキシコ系の文学：作品と論評』(英宝社、2005)

おそらく日本初のチカーノ文学研究書である。なのに、なぜ「チカーノ」ではなく「メキシコ系」の文学なのか。そこに本書の批評スタンスがあるようだ。本書は、白人性より先住民性を称揚するのが主流である今日のチカーノ研究の主要概念（例えば「異種混交」や「ハイブリッド」）をあえて鵜呑みにせず、リベラ、アナヤ、イスラス、ロドリゲスなど、代表的チカーノ作家の言説に表れるスペイン系白人への根深い劣等感や、先住民性への否定的感情を可視化することによって、チカーノ・アイデンティティの多様性を呈示する。また、「西漸運動」など、従来の東西というアメリカ文学の動線に、メキシコから北上する文学の南北軸が加わることがアメリカ文学観を更新するとも指摘する。今日評価の高い女性作家にはほとんど触れていないが、南西部の歴史やチカーノ文学の基礎知識を網羅しており、この分野に興味のある人には必読に値する書と言えよう。(喜納育江)

事務局より

◆日韓合同シンポジウム（仮称）の開催を2007年度に予定しています

ASLE-Koreaとの日韓合同シンポジウム（仮称）を、2007年に開催する予定です。1996年の日米ASLEシンポジウム（ハワイ）、2002年のASLE国際シンポジウム（沖縄）に続く、3回目の国際シンポジウムの開催となります。これまでの経緯を簡単にご報告しますと、まず5月の役員会で合同シンポジウムの開催が承認され、6月下旬にオレゴン大学で開かれたASLE隔年大会において、ASLE-JapanとASLE-Koreaの参加者によるインフォーマルな話し合いがおこなわれ、打ち解けた雰囲気のなかでテーマから開催地に至るまでさまざまな点について意見が交わされました。そして、10月の役員会・総会で、合同シンポジウムに向けた準備委員会の設置を決定しました。合同シンポジウムは、日韓の会員が互いの研究を知り、将来東アジアの文学・環境研究コミュニティを構築するための最初の重要な一歩です。シンポジウムの準備は準備委員会を中心に進められますが、シンポジウムで使用する共通テクストの翻訳をはじめ、さまざまな作業が必要になると思われます。会員のみなさまのご協力のほどをお願いいたします。

◆会費納入のお願い

会費未納入の方は、至急、下記郵便口座へお振込ください。（一般 5,000 円、学生 2,000 円）

口座番号　01300-0-93821

加入者名　文学環境学会

なお、前年度までの会費をお納めいただいていない方には、既に督促状をお送りしました。その後速やかに会費を納めてくださった方々に対し、ご協力に感謝します。しかしながら、会費を納めいただいたにもかかわらず、振込金額が未納分に満たないために未だに滞納状態にある方もいらっしゃいます。会費納入の際には、当該年度までのお振込をお願いいたします。

◆「文学・環境に関わる研究・活動業績」をお送りください

7 月 1 日付けで「文学・環境に関わる研究・活動業績」送付のお願いをいたしましたが、第一次集約の 9 月末現在、まだ多くの方々から情報をいただいておりません。研究・活動業績は一覧化した上でウェブに掲載し、文学・環境分野の研究・活動に役立てていただきたいと強く望んでおります。あらためてご協力をお願いします。

なお、一覧化に際して様式を統一しました。既にお送りしている「『文学・環境に関する研究・活動実績』ご記入・送付のお願い」（7 月 1 日付）をご参照いただき、記入例を参考に、統一書式でご記入くださいますようお願いします（様式はウェブにも載せる予定ですので、ご覧ください）。

◆大学院生組織が発足しました

既にお手元に案内が届いていることと思いますが、「学生であることのメリットを活かし、相互の研究分野の情報交換を行うこと、研究活動の裾野を広げること、学会活動へ積極的に参画することを目的」として、ASLE-Japan 大学院生組織が発足しました。ASLE-Japan には日本各地はもとより海外にも院生会員がいます。情報・意見交換や共同研究をとおして研究活動の発展が期待できますし、それによって学会の活力も増します。多くの院生のみなさんのご参加を期待しています。

◆2006 年度全国大会を仙台で開催します

とき：2006 年 9 月 9 日（土）ー11 日（月）

ところ：東北大学（宮城県仙台市）

研究発表およびシンポジウムを募集します。タイトル、発表要約（800 字程度）、連絡先を大会実行委員長の石幡直樹さん（東北大学）までお送りください。

送付先：〒980-8576　仙台市青葉区川内 41　東北大学国際文化研究科　石幡直樹

締切：2006 年 4 月 28 日（金）必着

【編集後記】ASLE-US オレゴン大会、ASLE-Japan 全国大会を中心に編集しました。お忙しい中、原稿をお寄せいただきありがとうございました。次号は 20 号になります。文学・環境学会の歩みが着実に重ねられています。（K）

【発行】

ASLE-Japan/文学環境学会
代表　生田省悟
事務局：金沢大学外国語教育研究センター
結城研究室内
〒920-1192　金沢市角間町
Tel: 076-264-5819, Fax: 076-264-5993
E-mail: yuki@ge.kanazawa-u.ac.jp

【編集】

編集代表　上岡克己
〒780-8520 高知市曙町 2-5-1
高知大学人文学部
TEL: 088-844-8197
FAX: 088-844-8249
E-mail:kamioka@cc.kochi-u.ac.jp